

I nterview

『Bokra』
パレスチナ写真集
株式会社ビーナイス 発行
1,600(＋税)
(アマゾン、全国書店で注文可)



子どもたちの笑顔とともに 中央が高橋美香さん

フォトグラファー 高橋美香さん

写真集で伝えたいもの

パレスチナと聞くと、紛争地、難民という言葉が連想されるけれど、そこには市井の人々の日常がある。高橋美香さん(41歳)はこれまで7回にわたりパレスチナに滞在し、困難に立ち向かう人びとと生活をともにしながら、写真を撮り続けている。

この3月20日にパレスチナ写真集『Bokra』を出版した。「ボクラ」はアラビア語の方言で「明日」。「明日こそは、今日よりいい日になりますように」、また明日も元気で笑えますように」と、美香さん自身が願いを込めてつけたタイトルだ。
キラキラした瞳に笑顔がはじける難民キャンプの子どもたち。働き、くつろぐおじさん、おばさんたちの穏やかな表情。それと同時に銃を構えた兵士がいる検問所、高さ8メートルの分離



トマト農場で働くマハ(2011年 ジェニン)



孫のアブドを抱きかかえて笑うバスマ(2013年 ビリン)

壁、子ども二人を殺されたおかあさんの哀しみの顔。これが今のパレスチナの現実だということが伝わってくる。写真に添えられた短い文章とともに、彼らの気持ちに寄り添う美香さんでなければ撮れない写真だと感じさせる。

昨年も秋から冬にかけて2ヵ月余り、ヨルダン川西岸地区の各地に滞在した。1回行くと2〜3ヵ月、パレスチナ家族のもとに居候し、家族の一員として生活をともにする。「おかえり、ミカ」それが彼女を迎える家族の言葉だ。

マスコミは空爆や戦闘で死者がでた時にしか報道しない。そして戦場カメラマンが悲惨な状況を伝えるが、見る側は遠い国の出来事としか思わない。「戦争の時だけではなく、イスラエルの占領下にあって、365日パレスチナの人びとは苦しめられています。



花のおいをかぐハヤ(2013年 ビッディヤ) いずれも『Bokra』より (写真提供 高橋美香さん)

でもそこにも私たちと変わらない日常生活があることを知ってほしい」

10年は追いつけられない テーマを持って

広島県生まれ。「小さい頃は人見知り、泣き虫で、どんくさい子でしたね」という。今の美香さんからはとても想像できない。小学校高学年からガリと変わり、物語を考えるのが好きで、将来は漫画家志望。わが道を行くタイプだったとか。中学生の頃、いつも熱心にニュース番組を見ている母親の隣でテレビを眺めながら、繰り返される「難民」という言葉がいつのまにか頭に入り込んでいった。「難民って誰? なぜうまれたの?」そんな疑問が強い興味に変わっていった。

高校時代は学校の雰囲気がいやで

パレスチナの日常に向き合い、名もなき人びとの声を拾い、その姿を追い続ける

鬱々としていた。「とにかく田舎を出たかった」美香さんは上京し、日本ジャーナリスト専門学校へ入る。そこで写真を学び、暗室作業に明け暮れた。先生、友人に恵まれ充実した楽しい学生生活を送ったが、恩師から言われた言葉がその後の生き方を決めた。

「たとえ食えようが食えまいが、10年は追い続けられるテーマを持って。それができなかつたら諦めろ」

テーマを持つことで甦ったのが頭の片隅にあった「パレスチナ難民」のこと。勉強したいと調べると、東京国際大学にアラビア語、中東問題を専門とする瀧美堅持たきみしんじという教授がいることがわかった。ここと決めると、専門学校卒業後実家に戻り、大学目指して受験勉強。「予備校には行かず、1日13時間も自学自習していました。何せ高校時代は勉強をさぼっていたので(笑)」

こうして東京国際大学国際関係学部へ合格し、休みごとにカメラ片手にアジアやエジプト、中米などを一人で旅した。卒業後はアルバイトで資金を貯め、アラビア語をもっと学ぶためエジプトへ語学留学。が、パレスチナへはなかなか向かえなかった。「通訳を介さず、やはり自分の耳で聞き、話しかかったので、会話に不自由がなくなっただけから行きたいという気持ちでした」

しかし、エジプトで世話になった通

信社の特派員が「行くなら今だよ」と背中を押してくれた。それが2000年、美香さん26歳の時だった。

愛するパレスチナの人びと

2010年に出版した『パレスチナ。そこにある日常』は美香さんが現地で体験した詳細な記録と、レンズを通してたまたまパレスチナが散りばめられている。自分の言葉で人びとに向き合い、耳を傾け、共に行動し喜怒哀楽を分かち合う。ストリートに彼らの懐に飛び込んでいくので、心を開いてくれるのだろう。ピリン村に住む親友のハイサム、ハムデイ、娘として可愛がってくれるハムデイのパパとママ。たびたび本の中に登場する人びとがとて近く感じられる。

「彼らは率直で明るくたくましい。心があたたかで、包容力がけた違い」それを強く示してくれたのが、ジェニン難民キャンプで初めて出会い、居候した家のマハ(写真の2段目段)だ。マハの夫はイスラエル軍の侵攻の時、連行され壮絶な拷問を受けたのが原因で、心身ともに不自由な体となった。マハは夫の介護をしながら、肉体労働に従事して懸命に6人の子どもを育てた。が、夫は46歳で亡くなってしまった。

「難民キャンプの普通のおかあちゃんなのですが、故郷を奪われ厳しい状

況にありながらも、希望を教えてください。息子が武装組織にリクルートされそうだった時『どんな組織も若者の血を利用し、使い捨てにするだけ。ありとあらゆる方法を使って息子が入るのを阻止した』そう。もの見方が鋭くて、ちょっとした言葉も本質をついているんです」

朝食のパンも買えないときがあるほど生活は楽ではないのに、美香さんに決してお金を出させない。一計を案じて、取材、撮影と偽り、マハと一緒にトマト農場で働き、農場主に自分の賃金はマハに渡してと頼んだこともあった。マハのような人の名もなき小さな声こそ伝えたいと思う。

ピリン村で分離壁に反対する非暴力デモを撮ろうと参加して、催涙弾を浴びる危険な目にあつたことも。占領地では水も電力も供給が少なく、シャワーも使えない。それでもパレスチナに向かうのは「大好きな友だちの笑顔に会いたいから」。それは美香さんにとって自然なこと、気負いは微塵も感じられない。彼女の人懐こい笑顔だっ

て待っている人たちが多いのだろう。恩師との約束の10年は過ぎたけれども、一生のテーマとして追いつけるつもりだ。この1月、夫の仕事の都合で西東京市からさいたま市へ引っ越したことを残念がる。ぜひ時々帰ってきてほしいもの。